



蝙蝠塚の謎



フエフキガエル

猫山賀の住むひびの入ったアパートから、その丘は眺められた。大樹が一本中央に聳え立っている以外何もない丘で、楕円形をしていることから、昔の墳墓ではないかと噂をする人もいた。実際、この周辺には小さな古墳がいくつもあり、そう思うのは当然であった。しかし、今までこの丘を調査した者は一人もいなかった。今後またぶん調査されることはないであろう。というのも、この丘は、某屋敷の敷地内にあり、丘の周りには誰も入れないように有刺鉄線が張り巡らせていたからだ。——神の領域、と屋敷の人は言うのだが、鳥居もなければ、大樹でさえ注連縄が施された御神木というわけではなかった。

この丘に上がろうと思えば上がれないことはない。有刺鉄線に電気は流れていないし、二メートルほどの高さだから、梯子を使えば簡単に侵入できる。またフェンスの一カ所に、南京錠の掛かった扉があり、鍵があればここから堂々と中に入ることができる。鍵がなければ南京錠を壊せばいい。

無為徒食をモットーとしている猫山賀は、安アパートの二階からしょっちゅう窓の外の景色を眺めて過ごしていたが、この丘が常に視界の中心にあった。周りが田んぼだらけというのもある。丘まで四、五百メートルの距離で、夕方になると、どこからともなく蝙蝠が集まり、丘の上で飛び交った。その光景から、地元の人たちはこの丘を蝙蝠塚と呼んでいた。塚というのなら、やはり古墳であった可能性が高いのだが、猫山賀にとって、それはどうでもいいことで、猫山賀の一番の関心事は、日々どのような暮らしをするかであった。三十に近い猫山賀はまだ独身で、養う者がいないというのは気楽である反面、侘しい暮らしにはなりやすく、一日の大半を無聊に過ごしていた。数少ない趣味の一つに読書があり、また散歩も好きであったが、どちらもお金がかからないという共通点があった。というのも、本は図書館で読むからである。

行きつけの図書館は、アパートから四キロほど離れたところにあり、二階建てのなかなか立派な図書館であった。車のない猫山賀は、自転車のように通っては、三、四時間そこで過ごした。三時間もあれば、簡単な本なら二、三冊は読めた。猫山賀の好きなジャンルはミステリーで、それも昭和のレトロな雰囲気醸すミステリーであった。しかし、そんな古い本は書庫にしかなく、リクエストする他ないのだが、比較的近代的な建物なので、検索用のパソコンは何台も備えてあった。

ある日、猫山賀はそのパソコンで面白半分に蝙蝠塚と打ち込んでみた。地元の図書館だから、ひょっと蝙蝠塚に関する本がヒットするかもしれないと思ったからだ。するとたして一件ヒットした。

『蝙蝠塚の謎』というタイトルのミステリー小説で、書庫本であった。猫山賀が歓喜して、リクエストしたことは言うまでもない。

地下にある書庫から司書が持って来る本は、どれもじめっとしていて、中には黴臭いものもあり、素手で触るのが気持ち悪い時がある。それで、猫山賀はいつも手袋を用意していた。

さて、この『蝙蝠塚の謎』という本だが、十五年ほど前に地元のアマチュア作家が書いた短編集だった。と言って自費出版ではなく、れっきとした出版社から出ていた。この出版社が発行しているミステリー雑誌の新人賞の最終選考に、その中の一編が残り、それが切っ掛けとなり一冊の単行本が作られたのだ。

窓際にある閲覧席で、猫山賀はわくわくしながらそれを読んだ。最も面白かったのは、やはり表題作の『蝙蝠塚の謎』である。その名の通り蝙蝠塚にまつわるミステリーだったが、しかし本格推理ではなく、むしろホラー的要素が強かった。作者は塔変木というふざけたペンネームをしていたが、それ以外のプロフィールは一切書かれていなかった。年齢も性別も分からない。だが、この界限の人間であることは、本を読めばすぐに分かった。というのは、どの短編にもこの近辺に実在する地名や建物が使われていたからだ。この図書館も出てくる。本の出版が十五年前のことだから、作者は現在、中年以降の者であることは推測された。

内容は、蝙蝠塚を所有する屋敷での奇妙な事件で、事件と言っても殺人事件のような犯罪性はなく、先ほど言ったように怪奇ホラーの色合いが強かった。

あらすじはこうだ。

——時は江戸時代。蝙蝠塚の持ち主である初代の当主は、海運業で大儲けをしたが、この時代は、豪商人がやたらと裕福な暮らしをしていて、武士は逆に一部をのぞいて質素な暮らしを強いられていた。商人から借金をする武士も多く、豪商人には頭が上がらないのが実状だった。

飢饉などがあり、商人たちも質素な暮らしを奨励されていたが、豪商人が質素な暮らしをするわけがなかった。寿命の短かった時代で、強欲だから豪商人になれたのだ。贅沢をして何が悪いという風潮があった。

やがて幕府はいよいよ財政が緊迫し、武士、商人及び町民を厳しく取り締まった。これがかの有名な儉約令だ。帯刀を許された武士が日頃から妬みを抱いている商人に対して、何をするか分かったものではない。いつなんどき屋敷や蔵を点検して、贅沢品があればそれを没収しないとも限らない。

初代の当主は、それを恐れて財宝を隠すことに決めたのだが、隠し場所に悩んだ。屋敷の中では、床下に埋めても、ひょっと勘のいい侍がいて、掘り起こさないとも限らない。で、あの丘に埋めることにしたのだ。なんだ、かえって人目につくではないかと思われるかもしれないが、あんな丘に誰が財宝を埋めるだろう、と意外性を狙ったようだ。もっとも、すべてを隠したわけではない。蔵の中にも多少は残していた。そうしないと、かえって怪しまれるからだ。しかし大半はあの丘に隠した。信頼の置ける使用人二人を使い地中深く埋めたのだ。その額は、今の価値に直せば数十億から百億円になるという。ところが、初代の当主は、まもなく他界した。財宝の在りかを知っているのは、使用人の二人のみとなった。この二人は主人の言い付けをよく守り、他言をしなかった。しかも、盗難に遭いやすい危険な場所ということで、二人は定期的に丘の見張りまで行った。

初代の当主は遺言書を残していた。その遺言書の中に暗示めいた語句があったが、それは蝙蝠塚の財宝の隠し場所をほのめかしたものだ。子孫が本当に困窮した場合だけ、その財宝を掘り出してもいいという条件つきで、はっきりとした場所を示さなかったのは、子孫のために美田を買わず、つまり欲しければ、自分の頭を使って探し出せということなのだ。商才と機根のあった初代の考えそうなことではあった。

時代の波に乗り、創業者がいなくなった後も、海運業は順調に資産を増やした。しかし世の中、そうそうまくは続かないもので、四代目あたりでついに家業が傾いた。この頃、財閥などが誕生し、大資本が海運業を始めたせいもあった。

初代の遺言書は、これまで大切に金庫に仕舞われていた。だが、四代目はその遺言書を読み、ぜひ自分の手でその財宝を手に入れようと考えた。全部掘り出すわけではない。必要な分だけ掘り出して、残りは次の代に譲るつもりだった。このように、この家系はそんなに悪い人間は出てこない。ただ初代の遺言書のせいで人生を狂わされた人間は、枚挙に暇がない。代々変わった人間が多いというのも、じつは財宝探しに夢中になって、家族や世間を顧みなくなったことが原因だった。つまり、丘の財宝はまだ誰も手にしていないのだ。最長百数十メートルの楕円形の丘は中央辺りが二十メートルほど盛り上がり、そう簡単に探し出すことができない仕様となっていた。というか、遺言書の暗示文を正確に読み解けばすぐに手に入るのだが、それができないばかりに、そこら中を無意味に掘り返す結果となっていたのだ。

もっともこれは、作者である塔変木の作り話である可能性もある。しかし猫山賀は、この単行本の余白に、それらしき書き込みを見つけたことで、これが問題の初代が残したという遺言書の暗示文ではないかと思ったのだ。

次のように書かれていた。

——丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝——

あの丘の秘密を知らない人なら、これが何のことかさっぱり分からないだろう。が、知っている者であれば、何となく財宝に関するものではないか、と気がつくはずだ。だが、それにしても、誰が、何のためにこのような書き込みを施したのか。一般人がわざわざこの図書館へ来て、そのようないたずらをするとは思えない。ならば作者自身が、この本をこの図書館に寄贈した際に、こっそりそのようないたずらをしたのではないだろうか。だがしかし、寄贈なら寄贈と印があるはずなのに、本のどこにもその印はなかった。著名な出版社の本なので、図書館が購入したのだろうが、たまたま読者の中に蝙蝠塚のことを知っている者がいて、そのようないたずらをしたとも考えられる。蝙蝠塚にまつわる話は、あの屋敷の周辺では知れ渡っているのだ。壁に耳ありというが、世間の耳は意外とよく聞くものであり、有刺鉄線を張り巡らせたことも、近所の人に疑念を持たせる結果となったのである。

さて、この書き込みが、あの丘に眠る財宝の有りかを示唆しているのであれば、書き込んだ者は初代の当主の遺言書を読んだことになり、だとすれば、ユーモアに富んだ人間の仕業ということになる。なぜなら、自分が発掘をせず、他人にそれとなく教えているからだ。もっとも、一般の人が、この書き込みを見て何かを連想するのは不可能であり、蝙蝠塚の話を知っている上で、なおかつこの本を手にした者だけがそのチャンスを得るといって、極めてマニャックないたずらとも言える。となると、やはりこれはミステリー好きの作者が、読者サービスとして提供したヒントではないのか。作者は地元の人間のようなだし、この図書館に来て自ら書き込みをしたのではあるまいか。

この単行本の目玉である『蝙蝠塚の謎』は、何代にも亘って繰り返された財宝の発掘調査にも関わらず、ついに一枚の小判も発見されぬままで終わっているのに、ミステリーとしては、何じやらほい、なのだが、その反面、代々当主たちの執念、焦りといったものがよく書かれていた。近年になればなるほど面白くなっていったのは、前に書いたように海運業が大手の資本に押され、経営が苦しくなり、登場人物が贅沢な暮らしができなくなったことによるのだ。読者にとっては、貧乏話の方が面白いだろう。塔変木という作者は、この屋敷のことをまるで身内のように詳しく書いているが、後で分かったことだが、この屋敷の当主の苗字は、塔木山というのだ。何となく怪しくなってきた。塔木山をもじって塔変木にしたのなら、塔木山と何か関係があるのかもしれない。

猫山賀は人づきあいの悪い男で、世間の事情に疎い。だから塔木山の屋敷に現在何名暮らしているのか知る由もない。が、夜中、アパートの二階の窓から見るかぎり、豪壮な屋敷のわりには、明かりが乏しかった。木々の合間からぽつんと一部屋明かりが灯っているだけなのだ。小説によるとかなり変わった人物が、近代の当主のようであったが、どんな人物なのか、猫山賀は興味を持った。

ところで、この図書館をよく利用する猫山賀は、気になる常連が一人いた。もうかなりの年配で、頭が薄くなっているのだが、いつも閲覧席に座り、たいてい何かを執筆していた。テーブルの上に本が数冊重ねてあるので、物書きかな、それとも学者なのかな、と思わせる雰囲気があった。ところがこの男性、じつに奇妙なところで寝泊まりをしていた。

この周辺で唯一山と言える標高百メートルほどのA山の、その麓の公園で、男性はテントを張って暮らしていた。最初見た時、猫山賀は、図書館で見る男性とは一変しているのに、狐につままれたような感覚になった。しかし、考えようによっては優雅な暮らしではある。昼間は図書館で過ごし、夕方になるとこの公園に帰ってくるわけだから。テントの汚れ具合からして、だいぶ長いことこの生活を続けているようだった。気楽そうだが、しかし生活費はどうしているのだろうか。年金が貰える年齢にはまだ早いように思う。家族はいないのか、と猫山賀は想像しないではいられなかった。

じつはこの辺りは、猫山賀のいつもの通り道ではなかった。男性が手提げ袋を提げて高架下を歩く姿を見つけて、どこに行くのか気になって自転車で後をつけたのだ。もちろん、気づかれないうようにそっと後をつけたのだ。男性は公園の隅にあるテントにたどり着くと、テントの中にバッグを入れて、しばらく横に立っていた。

後ろを通りかかる猫山賀の視線に気がついたようだが、すぐに目をそらした。道を通り過ぎる人の好奇な視線には慣れているのだろう。それとも猫山賀のことは眼中になかったのか。いずれにしても猫山賀は、ほっとして、自転車から降りることはせず、公園の脇道をそのまま通り過ぎた。

そこは人気のあまりない公園で、しかもまわりは田んぼと畑ばかりだったから、ホームレスにとっては、気楽な場所と言えるだろう。

ただ、公園といっても定番のブランコや滑り台があるだけで、ほとんど雑草に覆われた空き地だった。トイレも水道施設もなく、手を洗うことができないのだ。しかし、トイレは近くのスーパーで借りればいいことで、最近ではイオン水なども無料で提供している店もある。空のペットボトルにそれをつめれば、飲料水として十分であろう。どうせ食料はその店で買うのだから、何も遠慮することはない。簡単な料理はテントの前でできる。カセットコンロがあれば薪を拾う必要もなく、洗濯はコインランドリーですれば干す必要もない。つまり、人目につかずに暮らすことができる。便利な世の中になったものだ。ただテントは、昼間は畳んでどこかにしまっておく方がいい。年中テントを張ってあれば、さすがに誰かが通報する恐れがあった。この辺の住民は、おとなしい人が多いから、よっぽどのことがなければ黙認するだろうが、公園は公共のもので、勝手に占有はできないのだ。

雑草が蔓延しているということは、ここで遊ぶ子供もいないのだろう。

年に一回は業者が来て草刈りや、樹木の剪定をするらしい。その時は、テントを畳んで姿を隠すしかないが、前に一度、役所の人に来て、何月何日に草刈りをするからと、男性に注意を促したことがあった。いつでも持ち運べるテントということで、役所も大目に見ているのだろう。これがもしも家財道具一式そろってあれば、そんな生易しいことにはならないはずだ。

それにしても男性はいい歳をして、何を考えてホームレスのようなことをしているのか。図書館での落ち着きぶりは、単なる旅行者なんかではない。この地域で長いこと暮らした者か、あるいは生まれ育った者に違いないのだ。ということは、この近辺に元の家があるのだろう。そして現在そこに住めない事情があって、ホームレスをしているのではないだろうか。あの風貌は根っからのホームレスではない。教養がありそうで、本を傍らに置いて執筆をしている姿は、前に言ったようにどこかの大学の教授のような風格があった。身だしなみもきっちりしていて、髭も伸びてはいない。世間というのは、見た目ですぐ人を判断するものだから、これが仮に髭もじゃのむさ苦しい風貌をしていたのなら、たちまち通報されていたことだろう。

猫山賀は、男性の名前だけでも知りたかった。名前が分かれば、どこの家の出身か分かるかもしれない。もちろん、余所から来た場合は分からないが。

男性から二十メートルほど離れたところで、猫山賀はふと後ろを振り返った。すると、意外にも男性は、テントの横に立ったまま、こっちを見ていた。猫山賀はぞっと寒気を覚えた。さっきまで関心がない風だったのに、今見ると、まるで刑事が容疑者を見るような、鋭くそして侮蔑を込めた表情をしているのだ。

猫山賀の記憶では、今まで男性と図書館で視線が合ったことは一度もない。だがそれは、猫山賀が勝手にそう思っているだけで、男性は猫山賀の存在を認識しているのではないだろうか。だとすれば、猫山賀に自分の見すばらしいねぐらを見られれば不愉快な気持ちになり、ましてや自分の後をつけていることに気づいていれば、なぜ後をつけるのか猫山賀に対して警戒心を抱くのは当然であった。

猫山賀は猫山賀で、男性は何故家を出たのか、家族はどうしたのか、引き留める者はいなかったのか、それとも追い出されたのか、と次から次と疑問が頭をもたげてきた。

空恐ろしく感じながらも猫山賀は、自転車の速度を変えることはしなかったが、再び後ろを振り返ることもできなかった。きっとまだ自分の背中を見つめているに違いない、と思いながら遠ざかったのだ。

アパートに戻った猫山賀は、窓に寄りかかり蝙蝠塚を眺めると、すでにその上を蝙蝠が飛び交っている気配がした。その横の豪壮な屋敷を見れば、やはり一部屋のみ明かりが灯っていた。

ペンネーム・塔変木は塔木山をもじってつけたのであろうか。であれば、作者は塔木山家の一員かもしれない。分限者というのは生活に余裕があるせいか、わりと高級ないたずらをする者が現れて来ることがある。面白半分にあの暗示文を書き記し、さあ解けるものなら解いて見ると、お坊ちゃんが提示しているようにも思えた。が、もちろんお坊ちゃんが書けるような小説ではない。またあれが本物の暗示文で、蝙蝠塚に宝が埋まっているというのが事実であれば、最高級の知のお遊びと言っていいだろう。その反面、なぜ作者は自分で掘り出さないのか、という疑問が湧いてくる。しかしそれは、あの暗示文がまだ解けていないから、自分が解けていない暗示文を、誰が解けるものか、といううぬぼれがあるのではないだろうか。だが世の中は広い。ミステリー好きで頭の回転が速い者が、運よく蝙蝠塚の伝説を知っていて、掘り出さないとも限らないのだ。現に猫山賀は蝙蝠塚の伝説を知っている。たった数年前に、こっちに移り住んだ、言わば余所者なのだが。

猫山賀は自転車が好きで、あの丘の周辺をよくぐるっと回ったりする。最初に有刺鉄線が張られているのを見て、この丘には何かがあると直感したくらいなのだ。ましてや、古くからこの近辺に住んでいる者が、蝙蝠塚に関する噂を耳にしていないはずがなかった。

塔木山家はこの町の名家である。使用人もたくさん雇っていた。その中には口の軽い人間もいただろう。ただ誰一人として財宝を横取りしようとしなかったことは、さすがに忠義に篤い人たちであった。それは感心する。

しかし、そんなことより猫山賀が何より気になるのは、はたしてあの本を読んだ者が、この界限にいるのだろうか、ということだ。

あの本は書庫に長いこと置かれてあったのだ。そのために湿気ていたが、手垢による汚れはほとんどなかった。つまりあまり読まれぬまま書庫入りしたことになる。本というのは、いったん書庫入りすると、そこから引っ張り出す人間はめったに現れないものだ。なぜなら、書庫入りする前に、その本の存在を知っていた者だけがリクエストできるからだ。猫山賀の場合は、たまたま蝙蝠塚が検索でヒットして、それでその本をリクエストできたのだが、通常は無理であろう。

ところで、猫山賀は今思い出したのだが、図書館のカウンターでその本を受け取る際に、たまたま後ろを通ったのがあの男性だった。トイレでも行こうとしたのだろうか。あの男性が、猫山賀が受け取った本に目をやったかどうかは分からない。

が、もしあの本の内容を知っていて、ちらっと見たのなら、猫山賀に対して何らかの興味を持ったとしてもおかしくはないだろう。たとえば、その本を読んでいる猫山賀に視線を送った可能性もある。猫山賀は、本を読むのに夢中で、まったくそういうことに気がつかなかったが。

猫山賀は、本の余白に記されたその暗示文らしきものを手帳に記入して、アパートに帰った。

夕闇に佇む蝙蝠塚を見ながらその暗示文を読むと、何となくその意味が分かるような気がしてきた。

——丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝——

丘というのは蝙蝠塚のことで、霜の月というのは十一月で、満々とした青い光というのは満月で、二番枝は、天辺から二番目に目立つ枝、という意味ではないだろうか。たとえば十一月の満月の光を受けて、大木の二番目の枝が地上に影を落とす、その先端に宝が埋まっている、といった推理が成り立つが、ミステリー小説に有り勝ちな話である。これが初代の当主が遺書に残した暗示文なのだろうか。しかし、残念ながら暗示文としてはいくつかの欠陥がある。まず年中使える暗示文ではない。十一月の満月の夜だけに対応する暗示文である。また、その夜晴れるという保証もない。根本的な問題としては、どの時間を基準にするのか、というのがある。月は一定ではなく、東の空から西の空に移動するのだ。それに伴い木の影も移動する。さらに木は年々変化している。成長しているといった方がいいかもしれない。百年前と今とでは、ずいぶん違っているはずだ。要するにこの暗示文は、使えないということだ。もちろん、違った読み方があるのかもしれない。が、第三者にそれが分かるはずもない。第三者が分かるのは、せいぜい月光を受けて地面に映った枝の影が、どういう風に移動するのか、それくらいである。試しに、その影の通り道を端から端まで掘っていけば、あわよくば宝を掘り当てることができるかもしれない。少なくとも、最長百数十メートルの楕円形の丘を、ただやみくもに掘り起こすよりは、確立が高いだろう。

十一月が間もなく来ようとしていた。

ホームレスの男性は、図書館でよく会った。お互い見て見ぬふりをしているのだが、頭の中では、やはり気にしているようだった。たまにちらっとこちらを窺う様子が拝見された。

ホームレスの男性も猫山賀も気楽な身分なので、図書館に行けば会わない日はなかった。

またこの図書館には、もう一人ホームレスがいて、年齢は二十代後半か三十代、あるいはひょっとすると二十代前半かもしれない。というのは、彼はとても日焼けをしていて、髪がぼさぼさで、いつも同じ薄汚い服を着ているので、実際よりも老けて見えるのではないかと思うからだ。いずれにしても他のホームレスより格段に若いこのホームレスは、昼間の三、四時間、たいてい図書館で過ごしていた。書架の側面にある椅子に腰かけて、うつらうつらしていることが多かったが、それは毎日自転車で空き缶を集めているせいで、疲れていたのだろう。

図書館の入り口前の駐輪場に、空き缶を一杯積んだ自転車がとめてあれば、それが彼の自転車だ。背はそれほど高くはないが、たくましい体つきをしていた。

肉体労働なら他にもっといい仕事があるだろうに、と猫山賀はいつも思うのだが、その反面、空き缶を集めて生活しているということに猫山賀は尊敬せずにはいられなかった。話をしてみたいと思いながら、なかなかチャンスがなかったのだが、思いがけないところでその好機がやってきた。

猫山賀の住むアパートの前に自動販売機があるが、そこに彼は空き缶を回収しに来ていたのだ。回収と言っても、別に許可を得ているわけではないだろう。勝手にそのようなことをしているのかと、猫山賀は気になりながらも、「ご苦労さんです」と声をかけた。

ホームレスの彼は足で空き缶を潰していたが、ちらっと猫山賀の顔を見て会釈をした。十一月になったばかりのけっこう温かい日で、彼は少し汗をかいていた。冬物の服を着ていたせいもあるだろう。

猫山賀は、自動販売機にコインを入れてジュース缶を二本取り出して、その一本を彼に勧めた。こんなことは、猫山賀の人生で今まで一度もしたことがなかったのだが、たぶん彼と猛烈に会話がしたかったからだろう。

彼はやはり黙って会釈をしてジュース缶を受け取ると、猫山賀の顔を直視した。図書館ではしょっちゅう見かけているのだが、それは猫山賀の方で、彼はたいてい椅子にすわり眠りこけていた。だから、猫山賀のことを知らない可能性もあった。

「ちょっと僕と話をしませんか？」と猫山賀は言った。

彼は黙って頷いた。無口な人間なのだろうと猫山賀は思った。

二人はそばのベンチに腰かけて、猫山賀は言った。

「図書館の方でいつもお見掛けしますが、気づいていますか、僕のこと……」

すると彼は帽子を脱ぎ、頭をポリポリ掻きながら猫山賀の顔を見て「知っているよ。俺の方をよく見ているようだけど……」と言った。

初めてしゃべった言葉に、猫山賀はどきっとさせられた。彼は気づいていたのだ。

猫山賀は苦笑を浮かべて、「いつも大変だなあと思いながら見ていました。自転車に空き缶を一杯積んでいるでしょう」

この言葉に、彼は急に柔和な顔になった。やはり誰でも人に褒められればうれしくなるものなのだ。

彼の口は急に軽くなった。

「ああ大変だよ。一日中空き缶を集めているからね。しかし、それでもその日食べる分しかならない。しかも、場所によっては警察を呼ばれることもある。ここだって許可を貰って集めているわけではない。が、今のところ文句を言われたことは一度もない。まあ警察に捕まったら捕まったら、全然困らないけど。大して悪いことをしているわけではないし。むしろ道端に落ちている空き缶を拾ったりしているんだから。すぐに釈放ということになる。俺としたら、むしろそこでしばらく休養したいくらいなのよ。楽しんで三度の飯が食えるから。そればかりか、これから冬になれば、ホームレスは寒さの心配をしなくてはいけない。俺たちホームレスは、冬が来るたびに恐怖を感じるんだよ。毎年凍死する仲間が出て来るから」

「仲間といいますと、じゃあ、グループで暮らしているのですか？」

「まあね、自然と集まったんだけど。ただし俺たちのグループからは凍死者は出ていない。余所での話さ。ここは観光地が近くにあるから、他県からホームレスが集まってくる。観光地は飲食店も多いし自動販売機をあっちこっちにあるからね。もっとも、空き缶を集めているのは、俺ともう一人で、あとはぐうたらばかりだ。中にはたまに日雇いに行く者もいるが、年金で暮らしている者が多い。ホームレスをしていけば、電気代も水道代もかからない。最低限の食費ですむ。それとたまに入る銭湯代ぐらいだ。だから年金だけで十分やっていけるのさ」

「じゃあみんな公園かどこかで寝泊まりをしているわけですか？」

「公園ではない。前は公園だったが、いつも同じ場所だとやはり苦情がある。だから今は人目のつかないところで、こっそり暮らしているのさ。だいたいホームレスというのは、俺のように仕事をしている者は別として、昼間は人目を避けて夜活動するものさ。とくにこれからの季節は、へたをすれば凍死をする恐れがある。だから安易に眠ることができないのだ。俺も昔は夜通し歩いたものさ。しかし今はテントがあるし、寝袋があればまず凍死はしない。じつを言うと俺たちは、屋根が半分落ちた廃屋の中で寝泊まりをしているのだ」

「何名ですか？」

「三、四人だな。前にもう一人いたが、二年ほど前に余所に行ってしまった。余所といってもこの近辺だけだね。学者のようなおっさんやった。今でも図書館でよく会うよ。図書館で小説を書いているんだ。もっとも、俺はまだ一度も、その小説を読んだことがないけどね。原稿はいつも大きなバッグにしまっていて、しかもそのバッグには常に鍵が掛かっていた」

当然ながら猫山賀は、すぐにあの公園でテントを張っている男性を思い出した。

「その人なら僕も知っていますよ」と猫山賀は言った。

「閲覧席でよく書き物をしています、その人でしょう」

すると彼は、ちょっと驚いた様子で猫山賀を見た。「書き物をしていたからって、俺の言ったホームレスとは限らないだろう」

「いやそれが、僕はその人がある公園でテントの横に立っているのを見かけたのです。驚きましたよ。紳士然とした人ですから、まさかこんなところで寝泊まりしているとは思いませんでした」

「なら、たしかにその人だ。あの人は、見た目通り、もとは立派な屋敷の旦那だったが、ある事情があってホームレスをする羽目になったのだ」

「詳しく知っていそうですね」と猫山賀は、興味津々で言った。

「まあね。俺とあの人は、とても気が合ったから、お互いいろんな話をしたよ。今でも時々話している。俺はあの人が好きだ。だから、また一緒に暮らそうと何度も言うんだが、その度にあの人は拒んだ。それには理由があって、俺と一緒に住んでいるある男をととても嫌っている。それが原因で離れて行ったのだ。まあ一緒に住むと言ったって廃屋だからね。さっきも言ったように屋根が半分崩れている。しかし畳はあるしシートを敷いて横になれば、誰にも見られる心配はない。天国だよ」

「町中にあるのですか、その廃屋というのは？」

「ああ、図書館のそばにある。二階の窓から眺めることができるよ。古い木造の建物で、まわりは倉庫のような建物や、幼稚園があって、夜はしんと静まり返っている。垣根が崩れ、戸も開いたままだ。だから、誰でも自由に入れる。もちろん違法だが、どうせぶっ壊すしかない家なんで、俺たちは火事を起こさないように気を付けて暮らしているってわけさ」

猫山賀は、一番聞きたいことを尋ねた。それはあの男性が、塔木山ではないか、ということだ。

「では、その小説を書いている人が、この近在のお屋敷の旦那さんだったのですか？」

「近在も近在、ほら、あそこに大きな木が一本立っているだろう」と彼は、あの蝙蝠塚を指さした。「その横に古い立派な屋敷が見える。あそこの旦那だよ。今は他の者が住んでいるが、まだ屋敷の権利はあの人にあると聞いている」

「じゃあなんでホームレスをしているのですか？」

「詳しいことは俺には分からないが、親戚か誰かに居つかれてしまったらしい。帰ると命が危険だと言っていたな。かなり物騒な人物らしい。ただ生活費はけっこう貰っているようで、というか銀行の預金通帳を持っている。何もしなくても生活できるのだ。一緒に暮らしていたころは、食費は全部あの人が出してくれた。廃屋の庭に茂みがあってね、そこに隠れて、みんなでバーベキューをよくしたものだ。キャンプのようで楽しかったな。それでまた一緒に暮らそうと言っているんだけど。しかし、金があるならどこかアパートでも借りればいいものを、なぜああやってテント生活をしているのか、俺には分からないよ」

猫山賀がそれに答えた。

「アパートを借りるには保証人が要るからではないですか。あの屋敷で長いこと当主をしていた人には、人に頼みにくいのではないのでしょうか」

「まあそれもあるかもね。俺だって人に保証人になってもらうのは嫌だし。もっとも、アパートを借りる金も俺にはないけどね」

そう言って、彼はジュースをぐいっと一口飲んだ。

猫山賀は、さらに彼から話を聞こうと言葉を繰り出した。

「僕はあの人を書いた、と思われる小説を読んだことがあります」

と、こう聞いたのは、彼が案外あの男性のことを知っているのも、もしかすると蝙蝠塚の埋蔵金のことも知っているのではないかと、思ったからだ。

「ほうそうかね」と彼は言った。「で、どんな内容だった」

「短編集ですから、一編ずつ内容が違います。タイトルの『蝙蝠塚の謎』という短編は、その名の通り蝙蝠塚にまつわるもので、蝙蝠塚を所有するあの屋敷の初代の当主が、海運業をしていたのですが、江戸時代の儉約令か何かで、その財宝をあつ蝙蝠塚に隠したのです。そして、後の子孫がその財宝を探しまわるといった内容でした。もっとも誰も宝を手にしていません。それは遺言書に記されていた財宝の隠し場所の暗示文がとても難解だったからです」

「おれの聞いた話では、あの人は昔、ある雑誌の新人賞に応募して、最終選考に残ったことがあるらしく、賞は取れなかったが、特別に本を出して貰えたと自慢気に言っていたな。たぶんその本だろう。だが、そんな古い本どこで手に入れたのだい？」

「手に入れたわけではないです。図書館の書庫から引っ張り出してもらったのです。塔変木という変わったペンネームでした。マニアックな本ですから、あまり読まれていなかったのでしょう。古さのわりには、きれいな本でした。もっとも、いたずらか何か書き込みはありましたよ。その書き込みが謎めいているのです。蝙蝠塚の謎と言う短編の余白に記されていたので、僕はこれがきっと遺言書の暗示文ではないかと思います」

「何と書かれていたのかい？」彼はにわかに興味を持ったようだった。

猫山賀は、あの書き込みをすでに暗記していた。で、

「丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝、だったように思います」と答えた。

「簡単な書き込みだな。もっと抽象的なものかと思っていたよ。丘の大木というのは、たぶんあのこんもりした丘の大木のことだろう。蝙蝠塚の名がタイトルにあるわけだから、それに間違いない」

そう言って、彼は目をぎらりと光らせて、猫山賀を見た。前方にある蝙蝠塚を指さして「あの蝙蝠塚に財宝が隠されている、というのは、この辺では有名な話さ。ホームレスの俺だって知っている。これはあの人が聞いたわけではないよ。もう一人のホームレスから聞いたのだ。そしてこのホームレスが、あの人と大変仲が悪い。面白いことに、この二人は、以前は近所同士で、片や富豪で片や貧民。だからうまくいかないのだろう。俺も貧民だが、余所者だからあの人のことはあまり知らない。知らないから妬みも起きない。おそらくもう一人の仲間は、昔からあの人のことを知っていて、妬みがあったのだろう。だからあの人と一緒にめしは喰わなかった。自分で勝手におかずを作って喰っていたな」

猫山賀は言った。

「僕も余所者ですが、蝙蝠塚伝説は知っていますよ。近所の雑貨屋のおじさんが、教えてくれました。また、あの本の中にも、財宝伝説のことが書いてありますし」

「ところで、さっき言った暗示文を、もう一回言ってくれないか？」

彼は、急に真剣な表情になった。自分なりに推理をするつもりなのだろう。で、猫山賀は言った。

「ええ、いいですよ。丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝」

言い終わると同時に彼は言った。

「それは全部、あの丘の状態のことを示しているのだろう」

意外と平凡な言葉に猫山賀は、軽く頷いて、

「僕もそう考えました。満々とした青い光は満月で、霜の月は十一月のことでしょう。そして第二の枝は、あの大きな木の天辺から二番目に伸びている枝のことではないでしょうか。その枝の影が、財宝に関係しているように僕は思います」

「君の推理は正しいと思う。ただ不可解なことは——」

不可解、——猫山賀はおやっと思った。ホームレスが使うような言葉ではないからだ。

「不可解と言いますと？」と猫山賀は促した。

「なぜそのようなことを本に書いたのかということさ。もちろん、読者がそれを見て何のことが分かるわけがないし、蝙蝠塚がどこにあるのか、それさえ知っている者は少ないだろうが」

「ええ、それは僕もそう思います。まず初めに、あの丘を蝙蝠塚と呼ぶことを知っていなければなりませんからね。僕は、たまたま知っていましたから、蝙蝠塚の謎というタイトルにピンと来たのです。丘の真ん中に一本の大木があり、さらに屋敷の描写がそっくりなので、これはあの屋敷のことを書いたものに違いないと確信したのです。雑貨屋の主人に確認を取りますと、たしかにあの屋敷は昔から廻船問屋をやっていて、かなりの資産家だったようです。小説はミステリーというよりもホラー怪奇小説で、江戸時代、あの家所有の航海中の船が海面に浮かぶ長方形の箱を見つけ、それを引き上げたことから始まっています。まるで人間が入るぐらいの大きさでしたから、最初これは棺ではないかと乗組員は話し合ったそうです。が、江戸時代の棺は棺桶というように桶状のものが多かったので、半信半疑でした。棺ならそのまま放置するのですが、よく分かりませんから取り敢えず拾い上げて、中を確認することにしたのです。嚴重に密封された木の箱でしたが、驚いたことにその中に木でできた人形が入っていました。花柄の着物を着ていて、顔は人形とは思えないほど精巧にできているのです。フランス人形のように色が白く頬っぺたがすこし赤いのですが、目はなぜかつぶっていました。長い黒髪で整った顔立ちをしているこの人形は、年齢は十代半ばくらいの乙女でした。まるで今にも目を覚ますかのような姿でしたが、木でできていることは間違いありませんでした。そして、どういうわけか両手足を縄で縛られていたのです」

「あのおっさんが書きそうなことやな。ちょっと得体のしれないおっさんやったから。怪奇小説ならあのおっさんのイメージにピッタシや。で、それからどうなった」

「その人形は、船の所有物として、あの屋敷に運搬されることになったのです。というのは、船乗りたちも気味悪がってしまして、へたに処理をしては後で祟りがあるのではないかと、それで船主の塔木山家に相談したところ、こっちに持って来いということだったのです。この時の当主は、ちょっと変わった人で、奇異なものに大変凝っていました。当時としては大変珍しい外国の生き物を飼ったりしていたそうです。たとえば、オウムのような小鳥です。このオウムは人間以上によくしゃべるので、当主は気に入って座敷の中で放し飼いをしていたそうです。まあ短編ですから、そんなに詳しく書いてはいないのですが、乙女の人形と小鳥は、よくしゃべり合ったそうです」

「いっぺんに嘘臭くなったね」と彼は言った。「ファンタジーとしてはつまらん。子供だましのよう話なのかい」

「子供だましのようですが、どうも実際にそういう話が塔木山家であったようなのです。雑貨屋の主人も若い女性の人形があつた屋敷に居たと言つて居るのです。雑貨屋の主人は、若い頃あつた屋敷に出入りをして居ました。というのも、あつた屋敷の使用人と親しくして居たからで、大変詳しく知つて居ます。雑貨屋の主人が言つて居るには、乙女の人形は屋敷の一番奥まつたところに居たと言つて居るのです」

「居て居るって、まるで生きて居るようぢやないか」

「ええ、目も開いて、ゆっくりなんですが、歩けるそうです。二本足で」

「からくり人形なのかい、そいつは」

「さあそこまでは分かりません。着物を着て居ますから、体の仕組みまでは分からないのです。仮にゼンマイ仕掛けだとしても大したものですよ。よほどの名工が作つたのでしょ。しかし、なぜそれほどの名品が、木箱に入れられて海に流されて居たのか、捨てるに於ては勿体ないですよ」

「厄払いかもしれんな」と彼は言つた。「雛人形を川に流したりするだろう。それと同じ理屈ぢやないかな。どこかやんごとなきお姫様の身代りに海に流されたとか。それともしゃべったり歩いたりできるというのは、もう人形の域を超えて居る。持ち主は恐れ慄いて海に流したのかな。木箱に入れて海に流せば、人形の命を奪つたことにはならない。だから祟りもないのだろうと考えたのかもしれない。とにかくその人形が厄介になつたのだ」

「厄介という、まるで人形が何か悪さでもしたようですね」

「しゃべって歩いて、それで手が使えれば、何でもできるだろう。その人形に心があるかどうか分からないが、もしも悪い心ならば、何をするか分からない。心が無ければ無いで、やはり何をするか分からない。罪の意識が無いということだから。俺の想像では、実際に何か事件があつて、それで仕方なく海に流したのではないかと思う。悪いことをした人間なら牢獄に放り込めばいいのだが、人形はそういうわけにはいかない。燃やしたりするのも祟りが恐ろしくてできない。土に埋める方法もあるが、埋めたら埋めたで、いつ這い出して来るか、びくびくして暮らさなければならぬ。それで木箱に入れて海に流したのだろう。両手足が縄で縛られて居たというのは尋常なことではない。人形がかなり抵抗した証拠だ」

このホームレスはいつい何者なんだ、と猫山賀は思つた。これほどの推理ができるのなら、なぜ空き缶集めのような単純労働をして居るのだろう。ひょっとすると、ホームレスは彼にとって世を忍ぶ仮の姿ではないのか。あつた塔木山のホームレスもホームレスらしくないホームレスであるが、見た目はこちらの若い方が、髪の色がぼさぼさで着て居る服も近寄りたがたいものがあつた。つまり外見だけなら、誰が見ても立派なホームレスである。しかし、これだけ弁が立つとなると、少し見直してかからなければならぬだろう。

とにかくこれは、面白い展開になりそうな気が、猫山賀はした。日々無聊に過して居る猫山賀にとっては、ありがたいことである

蝙蝠塚は猫山賀にとって格好の空想の対象物であったが、それが今、現実のドラマとなりつつある。そのドラマの中に猫山賀は自分を置きたかった。傍観者でいるのはつまらないから。

このドラマにおいて、ホームレスの彼とホームレスの真似事をしている塔木山氏が主役に近い存在と言えるが、そのそばに近づけたことが、猫山賀はうれしかった。できるならば、乙女の人形とやらをこの目で実際に確かめてみたいと強く思った。この人形が、このドラマの主役になる予感がしたからだ。今もきっとあの屋敷のどこかに住んでいるのだろう。雑貨屋の主人が若い頃に見たというのは、もう何十年も前のことだが、人形は歳をとらない。だから乙女のままに違いないのだ。

「小説を読む限り、僕にはどうも塔木山家の連中は乙女の人形に振り回されているような感じがしますね」と猫山賀は言った。

「そうとも」と彼は応じた。「あのおっさんがある時俺に、塔木山家の男連中は昔からあの屋敷に住んでいる一人の女性に翻弄されてきたと言ったが、このことだったんだろうね」

「どんな顔をしているのか見てみたいですね」

「俺もだ」

「じゃあ、一緒にあの屋敷に入ってみませんか。塔木山家の方とお知り合いのようですから、その方がいれば屋敷に入れないことはないでしょう」

「いやだから、あの人は家に帰れないからホームレスになっているわけで、たぶん無理だと思う。しかし、俺も俄然興味が湧いて来たから、一度頼んでみよう。で、あの人が書いたと言う本のこと聞いてみるよ」

「お頼みします。もしOKが出たら、その時は僕に知らせてください。僕はこのアパートの二階にいます。猫山賀と言います。夕方以降はいつもいます。もしいなければメモを書いて郵便受けに入れてください。メモ用紙とボールペンは郵便受けに入れておきますから」

「分かった。それにしても変わった苗字だね」

「よく言われます。初めてあった人でもすぐに顔を覚えてくれます。猫山賀なんて、そうそういませんからね」

「堂々と名前が出せるんだから俺は羨ましいよ」と彼は言った。

彼は、自分の名前を人に言えないのだろうか。ホームレスになるには、やはり過去に何かあったのだろうか。が、他人のことには無頓着な猫山賀は、あえてその理由を聞かなかった。

彼は立ち上がった。そして、空き缶などを一杯積んだ自転車を押して去って行った。そういえば、猫山賀は彼が自転車に乗った姿をまだ一度も見たことがなかった。荷物が一杯あった時も無かった時も、常に自転車を押して歩いていたのだ。自転車を労わって、そうしているのか、まさか乗れないということはないだろうが、猫山賀は気になった。

猫山賀は、二階の窓から蝙蝠塚を眺めた。夕暮れで、中央の大木がシルエットのように見えるが、冬に近いということもあり、葉っぱが枯れ落ちて、寒々とした枝ばかりを晒していた。猫山賀はふと、そこに何か奇妙なものがぶら下がっているのに気がついた。それはまるで樹の実のようにも見えるが、距離からすればかなり大きなものだった。それが風にゆらゆら揺れていた。

やがて猫山賀は、はたと気がついた。その枝は『蝙蝠塚の謎』の余白に書き込まれた二番枝のことではないのかと。

最初猫山賀の推理では、十一月の満月の光に照らされた第二の枝の先が地面に映る影に、ヒントがあると考えていたのだが、あのぶら下がっているものを見た今、枝そのものに関係があると思直した。推理の幅を広げる必要を感じた。

近くに行って確認しようと、猫山賀は刻々と暗くなっていく屋外へ飛び出したのだ。

蝙蝠塚の側道に来た時に、猫山賀はどこかで見かけたような後姿を発見した。すぐにあの塔木山というホームレスであることが分かった。ホームレスといっても、実家のそばまで来ているのだから、偽ホームレスと言った方がいいだろう。塔木山も、あの奇妙なぶら下がりに気がついて、ここへ来たのだろうか。

突然、塔木山が後ろを振り返った。猫山賀の視線を背中に感じたのか。それとも足音に気づいたのか。この暗さの中では顔の表情はよく分からないが、驚いているようだった。猫山賀と認識したからだろうか。

猫山賀は、この時とっさに右手を蝙蝠塚の大樹に伸ばした。

「あの木の枝に何かぶら下がっていますね」

塔木山の後をつけてきたわけではないことを証明するために、そう言ったのだ。でなければ、この前のことがあるので、塔木山はより一層猫山賀を警戒することになるだろう。

塔木山は言った。

「君はそれを確認するためにここに来たのかね」

「そうです。アパートの窓から見えたのです。今まで気づきませんでした。今日初めて分かったのです。落葉でそれが現れたのでしょうか。いや、もっと前から落葉はしていたはずですが。

——もうこの暗さでは、はっきりと分かりませんが、何でしょうかねえあれは」

「人形さ。人形が枝にぶら下がっているのだ」

塔木山は、何の躊躇いもなくそう言った。

「人形!？」猫山賀は、この思いがけない言葉に、ぶるっと体が震えた。屋敷の中にいるとばかり思っていた人形が、あの高い木の枝にぶら下がっていると誰が想像しただろうか。——どうやって、という疑問が猫山賀の頭にすぐに浮かんだ。

塔木山は、そのことを疑問に思わなかったのだろうか。

夕闇の中、蝙蝠が飛び交う丘の一本のみの高木に人形がぶら下がっている構図は、美しくもあるが奇妙であった。

ただ、肉眼では人形なのか何なのか判然としない距離ではあった。

小さな点が二つ赤く光っているが、それは人形の目なのだろうか。耳を澄ますと、何やら人間の、それも乙女の声が聞こえてくるのだ。歌っているような、あるいは口ずさむような。

——丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝——

あの暗示文だった。

人形は、どのようにぶら下がっているのか。手で枝につかまっているのか。人間ならとても長時間持たないが、人形なら腕が疲れるということはないのだろう。またロープで吊り下げられている可能性もあるが、それだと誰がそのようにしたのか問題になる。とても人間の仕業とは思えない。天狗ならできるだろうが、運動能力の高い鳶職人でも、かなり危険なことに違いない。

第一そんなことをする理由が思いつかない。刑罰なのだろうか。人間で言えば、さしずめ晒し首といったところか。だが乙女の人形なのだ。声を聞けば、たしかに乙女である。どんな悪いことをしたというのか。それとも自発的にあの大木に攀じ登ったのだろうか。しゃべったり歩いたりできるのだから、木に登ることができて何の不思議もない。

人形は、下からでは、はっきり見えないが、着物を着ているように見えた。

猫山賀は言った。

「なぜあなたは、人形と分かったのですか？」

「私はあの人形の主人だからだよ。聞こえるだろう今、人形は盛んに歌をうたっている。呪文のような歌だ。あれは私が教え込んだのだ。ところで君は、私に興味があるようだね——話はあの若いホームレスから聞いたよ。猫山賀君だったね」

「そうです。では僕の希望を聞いてくださるんですか？」

「君の希望……ああ、あの人形に会うことだったね。ならもう会っているだろう」

「しかし、あんな高いところですから、何とかありませんか」

「この地上に降ろせという意味か」

「はい。そういうことですが……」

「無理だな。あの子は自分の意志であそこに上がっているのだ。私が教えた暗示文を解いて、あそこにいるのだろう。自分で宝を発見するつもりなのだ」

「じゃあやはり、あの図書館にあった本の書き込みは、塔木山さんがしたのですね」

初老の紳士は微笑を浮かべたのか、白い歯が見えた。

「君がカウンターであの本を手にとっているのを見た時、私はドキッとしたものだよ。以来君のことがずっと気になっていた」

「塔変木というペンネームで、あの本を書かれたのですね」

「さよう。小説を書くのが私の趣味なのだ」

「でも、なんであんな書き込みをしたのですか？」

「さあ自分でも分からんね。この丘の秘密を書き記しておきたいと思ったのだろう。と言って、正直に全部書くわけにはいかない。初代当主の深慮というものを無にしてはならない。財宝はあるが本当に困った時にだけそれを使え。そのため簡単には手に入らないようにあんな暗示文を残したのだ。頭を使って自分で探し出せということだ」

「塔木山さんは、すでにその宝の在りかをご存じなんですか？」

「いや、分かってはいない。それが分かっていたら自分で探しているさ。今、分かっているのは、たぶんあの人形だけだ。霜月の満月が近づきつつある。その夜にすべてが分かるだろう」

「その夜まで、あの人形はあの木の上にいるということですか？」

「そうだ。あの人形には魂がある。普通のカラクリ人形とは違うのだ」

「海に流されていたようですが……」

「呪われた人形だからだ。あの人形を作ったのは、腕のいい木彫りの匠で、首や関節が自由に動かせるように作った。それを作らせたのはある名のある豪族で、死んだ娘に似せて作らせたのだ。豪族は霊能力の高い陰陽師を知っていた。この陰陽師は式神を自由に操ることができ、死者の魂を呼び出すことができた。その陰陽師に娘の魂を吹き込んでもらったのだ。人形は立ち上がり、歩くようになった。そしてよくしゃべった。ところがどうしたことか、性悪だった。死んだ娘とは全然違う魂が入ってしまったのだ。口の利き方もぞんざいで、隙があれば人を欺こうとした。何よりも動物を虐待するのだ。その豪族には幼い子供がいたが、よくいじめられて、時には危険な目にあわされた。将来を案じた豪族は見切りをつけた。人形を処分することにしたのだ。そのことを陰陽師に言うと、祟りがあるという。どうしても処分したいのなら、人形が眠っている間に手足を縛り、海に流せ。額にお札を張れば目を開けることはないと言うのだ。で豪族は、そのようにした。ただそのまま海に流すのは可哀そうだから、棺のような箱に収めて、それを沖の方で浮かべたのだ」

「どうしてそういうことが分かったのですか？」

「箱の中にそういうことが書いた巻物が入っていたのだ。——この人形を拾った者はすぐに海に戻すように、と。しかしその巻物は人形が着ている着物の中にあって、船乗りは気づかなかった。それで、人形は塔木山家の一員として、過ごすことになったのだ。見た目はとても可愛い乙女だったから、家人も使用人も一様に大事に扱った。肌が木で固く、ご飯を食べない他は、本物の人間と変わらないのだ。だから、男の中には人形に恋をする者も現れた。かく言う私もその一人だ。私は生まれた時から、彼女と一緒に暮らしている。彼女もその頃は、わりと淑やかな乙女になっていて、私の面倒をよく見てくれたものだ。私は年々歳を取り体も大きくなっていったが、彼女は永遠に乙女のままだ。思春期になった私が、いつもそばにいる彼女に恋心を抱いたとしても何も不思議はないだろう。彼女に何かプレゼントしたくて、道端に咲いている草花をよく持ち帰ったものさ。彼女は頭がいい。いろんなことを知っている。人間以上に長けた能力がある。だから私は、あの暗示分を解説してもらおうと教えたのだ。

今日やっと解読に成功したのだろう。しかし、彼女は長いこと軟禁されていたはずだ。——
おお、……あいつはどうしたのだ。私をあの家から追い出した、あいつは……おかしいな、こんなに周りが暗くなっているというのに、明かりがひとつも灯っていないとは」

塔木山はそう言って、屋敷の方を見つめた。たしかに真っ暗なのだ。こんなことは一度もなかった。

猫山賀は言った。

「塔木山さん、あなたはあを家の当主でしょう。なぜ家に帰らないのですか？」

「だから私は追い出されたのだ」

「誰にですか？」

「私の叔父にだ。叔父は傲慢で、頭が少しいかれている。五年ほど前にあを家にやってきたのだが、叔父はある如何わしい宗教に入っていて、あつという間にあを家に乗っ取ってしまった」

「家の所有権は、まだ塔木山さんにあるとお聞きしましたが……」

「そうだよ。だから戻れないことはない。だが、そうするといつ命を取られるか分かったものではない。それが理由で逃げ出したわけだから」

「その叔父さんというのは、怖い人ですか？」

「見た目は普通だ。しかし、頭が異常で、何を考えているのか分からない。もういい歳なんだが、すごく元気でね。私よりもバイタリティーがある。しかし、いずれ話をつけないければならないだろう。ホームレス生活も辛いものがあるからな」

「それでしたら、僕の部屋に来られてもいいですよ」

「君はどこに住んでいるのだね？」

「もうすっかり暗くなりましたが、あそこにアパートの明かりが見えるでしょう」と猫山賀は指さした。「あのアパートの二階が僕の部屋です」

「なるほど、この蝙蝠塚を監視するには絶好の場所だな。何かの時にはお頼みするかもしれないが、今のところテント生活で問題はない。それより叔父のことが心配だ。どうしたものかひとつ見てこよう。君もあを屋敷に入りたいのなら、ついてくればいい」

「もちろん、ついて行きますよ。肝心の人形は空高くて、とても見るできませんからね。せめてどんなところに住んでいたのか見ておきたいです」

「じゃあ一緒に行こう」

塔木山は、手に持っている懐中電灯をパチリと点けた。猫山賀は、その電灯の明かりで、頭上の人形を照らしてくれないかと思ったが、頼むことはしなかった。

猫山賀は塔木山の後について歩いた。塔木山はたぶん一人で屋敷に入るのが恐かったのだろう。

ほとんど暗闇となった屋敷の門を潜り抜けて、二人は中に入った。昔の分限者らしく広い庭には松の大木が何本か立っていて、建物は不気味なほど静まり返っていた。誰もいないようだった。

何代にも亘って建て増しされた家は、昼間でさえその威容な佇まいに、見る者を圧倒した。入り口は何カ所かに分かれていた。

塔木山にとっては、勝手知った自分の我が家であるから、懐中電灯を振り回すこともなく、さっさと入り口に向かって歩いた。

引き戸は簡単に開いた。昔はたくさんの使用人がいて、家の中はごった返していたようだが、今は事業の縮小に伴い、数年前までは数名いたお手伝いさんも、ほとんど去ったようである。というか、頭がちょっといかれた叔父に追い出されたのだ。そして今日、軟禁状態にあった、乙女の人形も追い出されたのだ。いや、乙女の場合は、その判断がとても難しい。なぜなら、木に登るといふ不可思議な所業を見ると、何か魂胆があって自らしたとしか思えないからだ。たぶん自分から外に出たのであろう。であれば、それを遮る者がいなかったということであり、となると叔父はどこへ行ったというのか。

塔木山は座敷に上がる際、靴を脱ぐよう猫山賀に指示した。それは当然のことだ。しかし、もしも緊急事態が迫った時は、靴を探して履いている場合ではないだろう、と猫山賀は思った。それほど緊迫感があった。がそれも、当主の塔木山がそばにいるのだから、その時はなんとかしてくれるようにも思った。

塔木山が部屋の電気をつけた。明るくなった分、安心感が湧いてきた。しかし、部屋は増築されていて、奥の方は迷路のように入り組んでいた。

塔木山は、一部屋ずつ電気をつけていったが、使用人がいないせいで、どの部屋もうっすらとホコリがたかっているように見えた。

ある部屋の前で塔木山は立ち止まり、後ろにいる猫山賀を振り返った。

「この襖を開けた向こうに叔父はいつもいるのだ」

と言って、急に険しい顔つきになったのは、日頃から叔父を恐れているせいだろうか。

塔木山は、躊躇わずさっと襖を開けた。中は真っ暗だった。この部屋の電気は天井から下がっていて、その紐を引く必要があった。塔木山は懐中電灯で辺りを照らしながら、その紐を引いた。次の瞬間、二人は驚いた。叔父が死んでいたからだ。いや、この時はまだ死んでいたかどうか分からない。部屋の隅で横たわっている姿から、そう判断しただけだ。長い白髪で茶色い作務衣を着ていた。一癖ありそうな老人で、それが仰向けに倒れていた。

塔木山は最初驚いた顔をしたが、やがて安堵の表情に変わった。恐怖の対象が死んだからだろうか。

そのことを確認するために塔木山は、叔父に近づき顔をのぞき込んだ。しばらくして、塔木山は猫山賀の方に顔を向けた。

「やはり死んでいる。あの人形がやったのだろう」と言った。

「乙女の人形がですか……」

「そうだ、首を見てみる」

塔木山の指さしたところを見ると、叔父の首には強く絞められた痕があった。紐なんかではない。乙女と言っても木の人形なのだ。固い指をしている。その指が、首に食い込んだ痕だった。

「どうしますか、警察に連絡しますか？」

と猫山賀は聞いた。

「もちろん連絡はしなければならんだろう。だが、厄介なことになったな。私たちが最初の発見者なんだぞ。警察はどう思うだろうか。もっとも、私はこの家の当主だから、ここにも何の不思議はない。だが、私はここ数年ホームレス生活をしていて、そのことは警察も知っている。当主がホームレスをしていれば、巷で話題にならない方がおかしい。つまり警察は私を疑うはずだ。叔父に対して何か恨みがあって殺害したのではないかと。そう思われても仕方がない。実際、私は叔父に追い出されたわけだから、恨みがないと言えは嘘になる。だが私ではない、断じて」

猫山賀は塔木山の話信用する。しかし、蝙蝠塚のそばにいたことは、少し都合がいいようにも思えた。

「よくこの辺を散歩されるのですか？」

と猫山賀は聞いた。

塔木山は自分を疑っているのかと、猫山賀をちらっと見て「ああ、よく散歩するよ。私はこの家をいつも観察しているからな。叔父が今どうしているのかと気になって。そして今日だが、これはまったくの偶然だった。満月に近い夜だから、あの蝙蝠塚を見に来たのだ。私は初代が隠したという財宝の在りかをうすうす感づいてはいる。が、まだはっきりとは分かっていない。それでいつか蝙蝠塚に入り込んで調査したいと思っていた。叔父がいる以上それができないでいたのだが、しかし、もうその心配がなくなった。自由に出入りできる。家に戻ることもできる。ただ問題なのは、さっき言った警察が、私を容疑者として拘留するかもしれないということだ。まあ私は、身元がはっきりしているので、そこまではしないだろうが」

「僕が証人になってあげますよ」

「ありがとう。だが、君が知っているのは、蝙蝠塚のそばにいるあたりだろう。それ以前のこと分かっていない。警察はそれ以前のことを知りたいのだ。あいにく私は、人とのつながりが希薄で、ここに来るまで誰ともしゃべらなかつた。つまりアリバイというものが無いのだ。動機があつてアリバイが無いというのは、もっとも危険な状態だ」

と、塔木山は、困惑した表情をしながら、しかし冷静にそう言った。続けて、

「私はあの人形の弁護をしなければならないだろう。というのは、あの人形は叔父を絞殺したが、殺意があつたわけではないからだ。たぶん蝙蝠塚の秘密が分かつたので外に出ようとしただけなのだ。それで叔父と争つた。その証拠に、あそこの襖が開いているだろう。その向こうが彼女の部屋なのだ。

叔父は彼女が出ていくのを力づくで止めようとしたのだろう。だが木の人形に勝てるわけがない。普通の人形とは作りが違うのだ。斧でぶったたくしか方法はなかったのだ。なぜなら、人形は固い指を持っている。さらに人間のように手が疲れるということがない。だから、いったん首を挿んだ手は、もうどうすることもできない。木に登ることなんて朝飯前だ」

「警察も驚くでしょうね。尋問風景を想像すると、ちょっと滑稽ですが」

「尋問、はっはっはっ、彼女はしゃべらないよ。いや、しゃべることはしゃべるだろうが、自分の言いたいことだけをしゃべるはずだ。尋問とは関係なくね。しかし、誰も彼女を裁くことはできない。裁けるわけがない。人間ではないのだから。よく世間では、人間を襲った動物を射殺したりするが、彼女は銃弾なんかでは死ぬことはない。彼女が一番恐れているのは火事だ。火事———そうか、今、分かったぞ。彼女は火事を恐れてあの高木に逃げたのだ。これは私が昔、船員から聞いた話だが、木造船にいる鼠は、船が沈む前に上陸するらしい。それもたった今、沈もうとしている船ではないよ。何も問題ない船なのだ。動物には人間には計り知れない能力があり、ずっと先のことが分かるようだ。彼女は木造の人形だ。だから、火に対して恐れを抱いている。私の知るかぎり、彼女は真冬でさえストーブのそばに近寄らなかった。もっとも、寒さを感じないわけだが、しかし私がライターで煙草に火をつける際は、嫌な目で見ていたな」

「では、このお屋敷がそのうち火事に遭うということですか？」

「そう。もっとも、今日明日というわけではないが、近いうちに火事になるだろう。私はあの暗示文の解読に彼女が成功したと思って喜んだのだが、そうではなく、火事からの逃避だ。いや、暗示文も解読したかもしれない。でなければ、わざわざあんな高いところに上がる必要はない。遠くに逃げればいいわけだから」

「そうですね。で、仮にこのお屋敷に火を放つとしたら、誰でしょうか？現在誰も住んでいないようですが……」

「家の者が火を放つとは言ってはいないよ。外部の者だ。放火するとしたら、この家に、いや私に恨みを持っている者の犯行となるだろう」

そう言うと塔木山は、不敵な笑みをこぼした。誰が放火するのか、すでに分かっているのだろう。

猫山賀はすぐにあの若いホームレスが言っていた、廃屋で一緒に暮らしている地元出身のホームレスを思い出した。塔木山を嫌って一緒に食事をしない、塔木山もその男を嫌って、一人でテント生活をするようになったという、その人物だ。

で、猫山賀は、

「これはある若いホームレスの人から聞いたのですが、この近所でやはりホームレスになった人がいるようで、そしてその人は、何でもあなたのことをひどく嫌っているようですが……」

「そうだ。その男がまさに私を憎んでいる。憎まれる理由は単純だ。私がこの家の生まれだからだ。奴の家は貧しくて、また昔から代々私の家の使用人だった。しかしそれでも、幼いころは一緒に遊んだものだ。

奴はよく私の家に遊びに来たが、それには二つの大きな目的があったからだ。一つは豊富にあるお菓子を食すること、そしてもう一つは、あの乙女の人形に会うことだ。奴は明らかに乙女の人形に惚れていた。隙を盗んではちょっかいを出していた。私は何度もそのことを注意した。しかし、一向に聞かなかった。それで私は仕方なく奴を出入り禁止にしたのだが、そのことを未だに根に持っている。奴も異常なところがあって、以来ずっと私のストーカーをするようになったのだ。私がホームレスになれば、奴もホームレスとなった。そして、私の日常を監視しているのだ。今もきっとどこかで私の行動を見ているはずだ。奴も蝙蝠塚の財宝を狙っている。しかし奴は、蝙蝠塚ではなくて、この屋敷こそ財宝が隠されていると考えている。たしかに私の先祖があれほど蝙蝠塚を掘り返したにも関わらず、小判一枚出たためしがない。だから、そう思っても無理はない。財宝は多くは小判だから屋敷が燃えた後は、黄金の塊だけが現れると、奴は考えているのだ。私もそれはありかなと、最近思うようになった。というのも、この屋敷は代々建て増しをしてきたが、別に人数が増えたというわけではないのだ。それはたぶん部屋数を増やすことによって、隠し場所が不明瞭になっていくのを狙ったのだろう。初代の遺言書にも、この屋敷は解体することなく必ず建て増しをせよ、と書いてあるのだ」

そう言った後、塔木山はふと思い出したように、「こんな話をしている場合ではない。すぐに警察に電話しよう」

と塔木山は、電話のある場所に向かった。猫山賀は、ひとりその場に残った。大変な事件に巻き込まれる予感があり、このまま速やかに立ち去るのがいいように思ったが、しかし塔木山のことを思えば、それは薄情なことではあった。塔木山の証言者にならなければならないと、猫山賀は勝手にそう思った。

まもなく警察が来て捜査したが、この時のことはちょっと類を見ないだろう。木の人形が、人間の首を絞めて殺害したという、こんな奇怪な事件は世界中探してもありはしない。もっとも、塔木山の証言を警察は信用しなかった。そればかりか塔木山に容疑がかけられた。やはりホームレスをしていたことが影響したのだろう。警察はアリバイを訊いてきた。いつもは冷静な塔木山も、さすがにしどろもどろになり、早急にあの大木にぶら下がっている乙女の人形を刑事たちに見せる必要を感じた。刑事たちは笑った。が、容疑者の言い分も聞かなければならない。そのうえで任意同行を求める構えであった。

刑事たちは数人で塔木山を取り囲み、そうして、屋敷の外の蝙蝠塚へと向かった。

「大きなライトが要るぞ」

と塔木山は歩きながら言った。「木の高いところにぶら下がっているからな。懐中電灯ごときではとても見えんよ」

「なぜまたそんな高いところに上がったんや」と一人の刑事が訊いた。

そう思うのも無理はない。人形が動くというだけでも眉唾物なのに、木をよじ登ることができるのかと、誰でも思うことだ。

「説明すると長くなる」と塔木山は答えた。「とにかく人形が本当にいるということを確認してほしい。話はそれからだ」

大樹の下にやって来た。下といっても有刺鉄線の外側である。なおかつ一番盛り上がったところに大木があるから、懐中電灯を照らしたぐらいでは判然としないだろう。

ただ依然として、乙女の人形はあの暗示文を唱えていた。そして、赤い目が光っていた。

刑事たちは、ただならぬ気配を感じたようだった。それぞれ手に持っている懐中電灯を一点に集中して照らした。

刑事たちが、ざわつき始めたのは言うまでもない。

「サーチライトを持って来るか」と一人の刑事が叫んだ。

刑事たちは、大木の枝にぶら下がっている着物を着た人形を見てぎょっとしたのだ。塔木山の話が、満更嘘ではないように思ったに違いない。

「この有刺鉄線の中に入れないのかね？」と別の刑事。

「鍵があれば入れるが、あの人形が南京錠の鍵を持っている。彼女はその鍵で南京錠を開けて中に入り、その後でまた南京錠を取り付けたのだ。まあ警察なら、どこからでも簡単に壊して入れるだろう」

「お宅の言うことが本当なら、いったいあの人形は何者なんだ」と刑事。「どうして人間を殺害しなければならないのだ」

「それは災難から逃れるためだ」

塔木山は、刑事たちに人形を見せたことで一先ずほっとして、冷静に言うことができた。「彼女はすごく頭がいい。予知能力がある。あの屋敷が火災に遭うことを予知したのだ。それで屋敷から出て行こうとした。だが、それを私の叔父が引き留めた。彼女に殺意などなかった。ただ、叔父の首に手が伸びて力加減が分からなかったために、絞殺してしまったのだ。首を見ればちゃんと彼女の指の痕が残っている」

「たしかにきつく絞められた痕があったな。紐ではないとすぐに分かった。ところであの人形は、いつまであそこでああしているのかね」と年配の刑事が言った。

「ずっとずっとああしているだろう。屋敷が火災に遭うまでだが。しかし、もう一つの理由がある。それは説明しても理解されないだろう。だが、一応言っておく。宝探しのためだ」

「なんですかそれは――」と今度は若い刑事が言った。「可笑しなことを言うお人ですね。人形の件は、こうして実際に目にしたわけですから多少信用しますが、宝探しとは何のことでしょうか？」

塔木山は苦笑を浮かべて「それを説明するには、小一時間かかるよ。とにかく十一月の満月の夜までは、ああしているってことだ」

塔木山のきっぱりとした口調には、刑事たちに有無を言わせないものがあつた。

年配の刑事が言った。

「よーし、それでは、今日はもう暗いから明日の朝、クレーンか何かであの人形を下に降ろすとして、あなたは今夜どこで過ごしますかな？公園のテントならば、ちょっと署の方に来られて話を詳しくお聞きしたいのですが……」

「今話した以外に、話はない。その話も、あくまでも私の推測なのだ。あの現場には凶器となる物は何もなかった。私を疑うのは自由だが、私が警察に連絡したことを忘れないように。電話しなければ、ずっと誰にも発見されなかつたらうから」

「それはもちろん分かっていますよ。ただ、あの人形のことをもっと詳しく知りたいのです。あなたしか知っている人はいないわけですから」

「ああ、そういうことかね。じゃあ同行しよう。しかし、帰れるんだらうね」

「もちろん。何なら車で送ってあげますよ。ここでも公園でも」

「じゃあそうしてもらおう」

そうして、塔木山と刑事たちは車の置いてあるところに向かった。その際、塔木山はちらっと猫山賀の顔を見たが、何も言わなかった。

猫山賀は、去っていく塔木山と刑事たちの後姿をじっと見送った。

頭上の人形は、先ほどまでさかんに歌っていたのだが、今は歌うのをやめて、こっちを見つめているようだった。赤い目が下を向いていた。

その赤い目なのだが、蝙蝠塚を離れる時、猫山賀はときどく後ろを振り返ったが、どうも赤い目がこちらを見ているように感じられて仕方なかった。

その夜、猫山賀は寝ているとトントン戸を叩く音で起こされた。誰かのいたずらにしては妙な感じなのだ。固い乾いた音で人間の手ではないような感じがした。

ノックがいつまでも続くので、猫山賀は仕方なく起きて、ドアのそばに立った。用心のために声をかけた。

「誰ですかこんな夜分に——」

「わたしです」

若い女性の声だった。猫山賀にそんな若い女性の知り合いはいなかった。しかし、すぐにあの木にぶら下がっていた乙女の人形を思い出した。

「あ、あなたは蝙蝠塚の木にぶら下がっていた人ですか？」

人と言うのも変だが、人形ですか、というのも、失礼な感じがして、猫山賀はそう言ったのだが、たしかに自らの意思でしゃべって歩けるのだから、人と言っても大きな間違いはないだろう。それにしても、いったい何の目的でこの部屋に来たのか。猫山賀は空恐ろしいものを感じた。塔木山の叔父を故意ではないが絞殺したことと、あの赤い目で猫山賀の動きを追っていたように見えたのが、事実であったからだ。

「そうです。わたしはあの木から降りてここに来ました。あなたに会いに来たのです」

「僕に会ってどうしようと言うのです？」

猫山賀は間近で乙女の人形を見たいと思う反面、あの赤い目で見つめられることを恐れた。何よりその固い指先が自分の首に伸びてくる予感がして、ドアを開けるのをためらった。

「あなたに知らせたいことがあります」

「知らせるって何をですか？」

「あのお屋敷が火事になるということです。そして財宝の在りかです」

屋敷が火事になるというのは、塔木山の言ったとおりである。それよりも猫山賀は、宝の在りかの方に興味があった。で、ドアを開けることにした。

目の前に、花柄の着物を着た乙女の人形が現れた。目は赤くはなかった。あれは暗闇だけの特別仕様になっているのだろう。動物の目が夜中に光るのと同じ原理なのかもしれない。

整った顔立ちをしていた。木の人形だからそれは当然だが、やはり人間のような柔和さはなかった。ただ、凜とした清らかさがあり、男たちが夢中になるのも頷けるものがあった。

「さあ、どうぞ中に入ってください」

猫山賀は、乙女の人形を部屋に通した。不思議と恐怖感はなかった。彼女はゆっくりとした動きで部屋に入った。足は裸足だったが、猫山賀は気にしなかった。めったに掃除をしない部屋で、ホコリがたかっているから、明日掃除すればちょうどいいと思った。

彼女は卓袱台の前にちょこんと座った。この部屋に来た初めてのお客さんであり、猫山賀は何か飲み物でも出そうかと一瞬思った。もちろん、木の人形なので何も飲みはしないのだ。

猫山賀は向かいに座った。

「ではお話をお聞きしましょう。しかし、なぜ僕にそういう大事なことを話そうと思われたのかな？今夜初めてお目にかかった人間に」

「初めてではありません」

驚いて猫山賀は乙女の顔を見つめた。驚くのは当然だった。猫山賀はあの屋敷に入ったのは、今夜が初めてであり、それ以前に彼女に会った記憶がないのだ。どこで自分の顔を覚えたというのだろうか。

「じゃあ今までに僕の顔を知っていたと言うのですか？」

「そうです」

「どこで見たの？」

「あなたはよく蝙蝠塚の周りを自転車で散歩をしています。わたしはお屋敷の中からその姿を拝見していました。じつは、わたしの目は遠近が自由に利くのです。最近の言葉で言えば、ズームアップできるのです」

人間以上の能力がある乙女の顔を猫山賀は、しげしげと見つめた。乙女は恥じらいからか瞬きをした。

頭脳は不老不死で、昔のことから現代まで驚くほど知識を得ているに違いない。だが、籠の鳥のようにその知識は限られた範囲ではないだろうか。井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さを知る、である。

「では、宝の在りかを教えてくださいませんか？」

単刀直入に猫山賀は聞いた。なぜ赤の他人にそんな大事なことを告げようとするのか、疑問に思いながら。

乙女の人形は、背筋の伸びた美しい姿勢で口を開いた。

「あのお屋敷の初代の当主が残した遺言状の中に、ある暗示文があるのですが……と言っても知るはずがないでしょうが」

「いや、知っているよ。僕は塔木山さんが書いた本を読んでいるからね。思いがけずその暗示文を目にすることができた。今ではすっかり暗記している。丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝、——だろう。あなたがその二番枝にぶら下がって、そのように歌っていたようだが」

「そうです。その二番枝にわたしはぶら下がっていました。十一月の満月の夜に、その枝から眺めた、とあるところに宝は眠っているのです。その謎解きが前日に分かったのです。ところが今日、わたしは塔木山の叔父を思いがけず絞殺してしまいました。それはわたしの失敗でした。殺すつもりはなかったのです。ただ叔父が強くわたしを抱いて外に出さないようにしたために、思わず手に力が入り、首を絞めてしまったのです。わたしはその時、慌てていました。というのは、お屋敷が放火されることを予知していたからです」

「塔木山さんが僕に説明してくれたことと同じだ。それで、その放火をしようとする人間も分かっているの？」

「はい。もうじきここへ来ます」

「なんだって！」

猫山賀は、思わず叫んだ。「ここに来るって、本当かい？」

「はい。わたしには見えるのです。今、階段を上がっています」

猫山賀は、ギョツとしてドアの方を向いた。鍵を掛けていないのだ。

猫山賀は立ち上がり、鍵を掛けようとドアに向かった、その時、ドアがざっと開いた。

見るからに粗野な風貌をした小男だった。背は低いが頑丈そうな体格をしていた。かなりの年配で、髪が伸びホームレスのような小汚い格好をしていた。体臭もあった。男は猫山賀を睨みつけて、「おい、女がいるだろう」と凄みのある声で言った。

「人の部屋を勝手に開けてはいけませんよ」と猫山賀は、部屋の中を隠すように立ち塞がった。

「警察を呼びますよ」

「じゃかましい。わしはあの女に用があるんじゃ。あの女がここに入るのをちゃんと見届けたんじゃ」

「ストーカーですか？」

「あほ、わしはホームレスじゃ」

男は土足のまま上がりこんだ。

ここで猫山賀と取っ組み合いの喧嘩となった。男は人形のことを女と言った。男にとっては人間と変わらないのだろう。そしてこの男が、若きホームレスが言った塔木山を妬む男であり、塔木山が言った屋敷に放火する男であることを猫山賀は瞬時に悟った。

「お屋敷が燃えている」

この時窓際で、立って外を眺めていた彼女が、そう言った。

途端、なぜか猫山賀はふっと力が抜けた。その隙に男は猫山賀を突き倒した。

そうして、棒のように立っている彼女を、男は抱きかかえ部屋から出ようとしたのだが、その時ドアが開いて、あの若いホームレスが入って来た。

若いホームレスは、息を弾ませながら言った。

「やはりここにいたか。ずっと後をつけていたんだよ。途中で足取りが分からなくなっが、下を通りかかった時、たまたま争う声がして来てみたのだ。それにしても、何という光景なんだ。

——それは人間なのか、それとも人形か」

「わしにとってはお姫様じゃわい。可愛い可愛い子供の頃からの憧れのお方じゃわい」と男は言った。

若いホームレスは言った。

「あんたはさっき屋敷に火をつけたね。今夜妙にそわそわして、突然廃屋から出て行ったので、おかしいと思って後をつけてみたのだ。そしたら、あの屋敷に入り、しばらくして、あんたが外に出て来たと同時に屋敷に火柱が昇った。これはいけないと、俺は消防署に連絡した。その隙にあんたはいなくなった。あわてて捜していたら、遠方からこっちに来るあんたの姿を見つけた」

屋敷の方で、消防車のサイレン音がうるさく聞こえてきた。

男は人形をしっかりと抱えているが、もう逃げ場がなかった。

男としては、自分を知っている者が現れようとは思わなかったのだろう。

ここまでの経緯を推測すれば、男は塔木山が警察の車で署に向かったのをどこからか見ていたのだ。塔木山の叔父が殺害されたことで、今夜がチャンスだと考えたのだろう。そして深夜、男は廃屋から抜け出して、予ねてから計画していたあの屋敷への放火を実行した。男が屋敷を放火した理由は、男にとってあの屋敷は、子供の頃からの嫉妬の対象物だったからだ。貧乏だった男は、豊かな暮らしをする幼馴染の塔木山を妬み、ストーカーとなった。塔木山がホームレスをすれば、自分もホームレスとなって、監視を続けた。この男は、ひょっとすると、ホームレスになれば自分も塔木山と同格になると考えたのかもしれない。しかし、ホームレスにならなければ、上からの目線でいられたので、やはり塔木山のすることなすことが嫉妬の対象となっていたのだろう。塔木山がホームレスになれば自分もなり、そして塔木山の持ち物である乙女の人形を手に入れようとしているのではないだろうか。

さて、男は自暴自棄になったのか、窓を開けるとそこから人形を抱えて飛び降りた。窓の下は田んぼで、刈り取った後なので何もなかった。

男は腰をしこたま打って立てない様子だった。人形は傍らに横たわっていたが、びくとも動いていなかった。

アパートの住人が、この騒ぎに起きて、一斉に電気を点けた。

すぐに猫山賀と若きホームレスは、アパートの階段を下りて田んぼに入った。

アパートの明かりで、田んぼは照らされていた。窓を開けてこっちを見ている住人もいた。

男は腰の骨でも折ったのか、その場で蹲って唸っていた。それよりも気になったのは、人形である。残念なことに落ちた衝動で首が外れていた。人間なら即死の状態だろう。

猫山賀は恐る恐る近づいて、人形の様子を観察した。人間のように脈を取るわけにもいかず、また呼吸もしていないから、死の判定がとても難しい。何をもって死とするのか、この場合は人形の目がつぶったままだとか、尋ねても返答がないとか、そういったことで判定するしかないだろう。あるいは、再び首を胴体に引っ付ければ目が開いてしゃべれるようになるかもしれない。もしそれでダメなら、本当に魂が抜けていったことになるが、この場合でも特殊な能力を持った祈祷者によって再び魂を呼び寄せる可能性もないことはないだろう。昔にできて、今はできないということはないからだ。ただ現在、そのような陰陽道やその他の魔術に精通している者がはたしているのか、となると疑問ではあった。

とにかく余所の田んぼに長くいるわけにもいかないので、猫山賀は、乙女の人形を抱きかかえて二階の自分の部屋に戻ることにした。首の方は若きホームレスが持ってくれた。動けない男の方は救急車でも警察でも呼べばすむだろう。

若きホームレスが乙女の首を持って後に続いた時、アパートの住人の中から悲鳴が聞こえてきたが、それはその首を人間のものと勘違いしたからだろう。

乙女の人形は精巧に作られていた。球体関節というのがあるが、そのような仕組みで、自由に関節が動くようになっていた。そのため、一端取れた首は、素人ではとてもつなげることは不可能で、木を継ぎ足して、壊れた部分を修繕する必要があった。それは匠しかできない技だ。当分は、あるいは永遠に置物として部屋に飾っておく必要があるだろう。

猫山賀は、せっかく宝の在りかを聞くチャンスを失ったことを残念に思った。不謹慎だが、今度の火事で宝が出て来るのではないかと、期待するしかなかった。

屋敷は勢いよく燃えていた。

消防車が数台で、懸命に消火活動を始めたが、屋敷は木造だから、火の回りが早く、おそらく全焼になるだろう。

放火した男は妬みの元となっている屋敷のどこかに初代の財宝が隠されていると思って火をつけたのだろうが、仮に宝が出て来たとしても、男がそれを手に入れることはできないのだ。男には懲役刑が待っている。誰にも気づかれないようにするつもりだったのだろうが、同じホームレス仲間後ろ髪を引っ張られる形となった。不運だったと言うほかない。

見ると、塔木山の姿が蝙蝠塚の脇で確認できた。火事でその周辺が明るくなっていたからだ。自分の家が火事になっているというのに、テントで寝ている場合ではなかったのだろう。

屋敷が火事になるという塔木山の予想は当たった。しかし、塔木山は気づいているはずだ。木の枝にぶら下がっているはずの人形がないことに。

その証拠に、塔木山の持っている懐中電灯の光は、何かを探しているかのようにあちらこちら彷徨っていた。

猫山賀は、塔木山に知らせに行く必要を感じた。放火した男が田んぼにいることと乙女の人形がアパートにいることをだ。

で、猫山賀は若きホームレスに向かって、

「ちょっと僕は塔木山さんに、このことを知らせに行ってきます。田んぼにいる男をどうするか、塔木山さんが決めてくれるでしょう」

「どうするもこうするも、早く救急車を呼んでやらないとあの人を放置するわけにもいかないよ。放火犯だが、俺とは寝食を共にした仲だからな」

「そうですね。では、救急車を呼びましょう」

猫山賀は近くにある公衆電話で、電話することにした。そして、その足で蝙蝠塚に向かったのだ。

塔木山はおろおろしていた。屋敷が放火された失望感もあるだろうが、それ以上に人形の姿が見えないことに不安と焦燥を覚えたのだ。塔木山の予想は、火事の方は当たった。しかし、人形は満月の夜まであの木にぶら下がっていなければならないのだ。

猫山賀は後ろから声をかけた。

「人形をお探しですか？」

塔木山はびくっとして、後ろを振り返った。

「ああ君かね。凶星を言われてドキッとしたよ。その通り、あの人形を探しているのだ。丘の上にいるのかと、さっき光をぐるっと当ててみたのだがいなかった」

「ここにはいませんよ。僕の部屋にいます。それを知らせにここに来たのです」

「なんだって、君のアパートにいるのかね」

「はい。それとお屋敷を放火した犯人もいます」

「それはどういうことかね？」

「理由を説明すると長くなります。結果だけ言いますと、乙女の人形が僕の部屋に来て、それを追いかけて放火犯が来たのです」

「やはり放火はあの男の犯行か、私は、あの男が木にぶら下がっている人形を持って行ったのかと思っていたが、よく考えればそんな芸当が奴にできるわけがない。人形が自らの意思で、君の部屋を訪ねたのだろう。だが、なんで君の部屋を訪ねたのかな？一度も会ったことがないだろうに。あの人形はただの人形ではない。魂が入っている。人間と同じ感情を持っている。たぶん君に惚れたんだらう。しかし、あの短時間で、よく君に惚れたもんだな。感心するよ」

猫山賀は、人形が以前から自分を知っていたことは塔木山に言わなかった。今は一刻も早くアパートに帰らなければならなかった。救急車が来るからだ。

「家の方はもうどうにもならん」と塔木山は、屋敷の方を見て言った。

「全部が焼け落ちるだろう。屋敷は消防士に任せて、では、君の部屋に行ってみるとするか。しかし、あいつがすでに行ったのなら、今頃あの人形を持って逃げているんじゃないかい」

「それが逃げようとして、二階の窓から飛び降りて、動けなくなっています」

「やはり百聞は一見に如かず、だ。行って見ないと、さっぱりわけが分からんよ」

猫山賀は、人形の首が取れたことは言わなかった。どうせ分かることだ。

アパートに戻ると、ほとんど同時に救急車がやって来た。猫山賀は、すぐに救急隊員に田んぼにいる男を指し示した。

塔木山は、男を見たが何も言わなかった。怒りを乗り越えていたのか、それともこうなる運命を予想していたのか、普段通りの紳士であった。

男は担架で救急車に乗せられて、そして去って行った。その前に猫山賀は、救急隊員から詳しい状況を聞かれたが、適当に答えた。説明すれば長くなるうえに、信用されない恐れがあったからだ。

そのうち警察が病院へ行って直接尋問するはずだ。もちろん、このアパートにもやって来るだろう。警察は、なぜ放火犯がここに逃げて、二階から飛び降りたのか、疑問に思うはずだ。

首の取れた人形は、畳の上に横たわったままぴくりともしない。この人形を追いかけて、放火犯は来た、と言って警察は信用するだろうか。まあ木の枝にぶら下がっていたのを見た刑事の中には、信用する者もいるだろう、その期待は非常に薄い。

若きホームレスだけが証言者だ。しかし、放火犯と同じホームレス仲間であったことで、信憑性は下がってしまうだろう。後は塔木山がその頭脳を持って、どれだけ弁舌爽やかに論じ立てるかだが、その塔木山でさえホームレスをしているのだ。

塔木山は屋敷が燃えて、今度こそ本物のホームレスになったと言える。

その塔木山は、突っ立ったまま悄然と横たわる人形を見つめていた。声をかけることも抱きかかえることもしなかった。首が取れている人形を抱きかかえても変な感じになるわけだが、声をかけなかったのは、この悲惨な状態を見て、気が動転していたからではないだろうか。もっとも、人形に話しかけたところで返事をするはずもないのだ。ただ人形は火事で焼けたわけではない。首の一部を破損しただけなのだ。直せないことはないだろう。問題は魂が戻って来るかどうかだ。戻らなければただの人形で、魅力は半減するが、塔木山のことだから、捨てたりはせず、きっと部屋の中で、永遠に飾っていることだろう。だが、その飾る部屋も、もうないのだ。まさかテントの中で一緒に暮らすわけにもいかないだろう。

「どうしますか塔木山さん」と若きホームレスが言った。

「もう帰るところがなくなりましたね。テント生活も辛いでしょう。どうです、また俺たちと一緒に暮らしませんか。もうあの男はいませんから」

塔木山は、ゆっくりと頷いて、

「仕方がないがそうさせてもらおうか。この人形を隠しておく必要があるからな。当分厄介になろう。そのうちまたあそこに家を建てるつもりさ。あの屋敷には火災保険を掛けているので、そこそこの家が建つだろう」

「いいなあ塔木山さんは」と若いホームレスは、溜息交じりに言った。「金持ちはいつまでたっても金持ちです」

塔木山は、若きホームレスに向かって、

「家が完成したら、君を呼びたいと思っている。他のホームレスはダメだが、君なら見込みがある。一緒に暮らそうじゃないか」

言われて若いホームレスは、嬉しいような悲しいような複雑な表情をした。

「俺なんか、そんな立派な家には住めませんよ」

「何もタダで住まわそうと言うのじゃないんだ。家には家の仕事がある。君なら料理もできるし、空き缶集めをする忍耐力もある。家の使用人として働く気はないかね」

若きホームレスは、少し考えて「そうですね。その時になって、心が傾いたなら、そうさせてもらいます」

「ぜひそうしてくれたまえ。で、この人形を君のねぐらに持って行きたいのだが、手伝ってくれるかね」

「もちろんです」

「しかしその前に警察が来て、この人形を調べる必要があるだろう。叔父を絞殺した、その指の型をとって、叔父の首に残っている痕跡と照合しなければならないからな。しかし、困ったことに、もしもそれが一致すれば、証拠品として、警察に没収される恐れがある。どうしたものか、私は今悩んでいるのだ」

「それ以前に、警察がこの動かない人形を見て、そんなことができるのかと疑うでしょう」と若いホームレス。

「もちろんそうだ。あの野郎が余計なことをしなければ、今もちゃんと人形は動いてしゃべれて、手も自由に使えただろう。しかし、こうなっては説得力というものがない。せっかく今夜警察に行って、そのことをくどいほど説明したのだが、空しいものになってしまった。唯一の望みは、あの野郎が、この経緯をちゃんと警察に伝えてくれるかどうかだ。それを祈るしかない。それにしても人形は、よくこの部屋にやって来れたものだ。で、来た時、人形は何かしゃべっていたかね？」

「はい。財宝の在りかを教えるとか言っていたのですが、こうなってはそれも期待できなくなりました」と猫山賀。

「なんでそんなことを君に言ったのかな。この娘には予知能力がある。自分の命が短いと悟って、君に解けた答えを教えようとしたのかもしれない。あの野郎が木にいる自分を見つけて、引きずり落とすと予想したのであれば、そう考えてもおかしくない。しかし、この火事で財宝が屋敷内から発見されれば、今頃は露わになっている可能性がある。ちょっと見に帰る必要がありそうだ。消防隊員がネコババするとは思えんが、財宝のほとんどが小判だから、一、二枚ポケットに忍ばせないとも限らない。まあ一、二枚なら消火賃としてあげてもいいが、そこに百枚あれば百枚とる者もないと誰が断言できよう」

「でしたら、俺も一緒に行きましょう」と若きホームレスは言った。

「そうかね。それはありがたい。一人より二人の方が、目が利くからな。消防隊員が見つめる前に見つけようじゃないか」

猫山賀が、慌てて言った。

「その時に、警察がここに来て、この人形を持って帰ったらどうしますか？」

「その時は警察の好きなようにさせるしかないだろう。動かない人形を犯人扱いできるわけがない。法律で人形に罪を問うことは不可能だ。たとえ殺人犯であっても。私は今そのことに気がついた。場所を取るだけの人形を持ち帰っても仕方ない。つまり今度の事件は迷宮入りすると私は思う。もちろん警察は私を疑っているが、証拠が何もなし。拘留することはできないだろう」

考えてみれば、この塔木山という男も、得体のしれないところがある。家族というものを持たず、ひたすら推理小説に没頭している。しかも、本になったのは一冊のみだ。その資産からすれば、何冊でも自費出版できるのだろうが、それをしないところを見ると、かなりの遅筆あるいは完璧主義者なのだろう。因みに、本となった一冊は、破綻の少ない作品集であった。

塔木山の相棒となるだろう若きホームレスも、じつに変わった性格をしている。何が面白くてホームレスを続けているのか。空き缶集めなど非効率な仕事をしていて将来どうするのか。また彼は見かけによらず、意外と頭脳が明晰であったことも、猫山賀は一目置いていたが、そういったところが、塔木山の鼻窟を得ているのだろうか。

この変わった二人なら、案外うまくいきそうな感じを猫山賀は受けた。

さて二人は、火災現場に向かった。

部屋に残った猫山賀は、静かに横たわる人形を、しげしげと見た。見れば見るほどよくできていると思う。カールしたまつ毛の瞼が今にもぱっちり開きそうな気配であった。

魂が戻って来ない限り、もう二度と目を覚ますことはないのだろう。それにしても塔木山が言ったように、彼女は何故、猫山賀に蝙蝠塚の財宝の在りかを教えようとしたのか。猫山賀に惚れたから、というただそれだけの理由で、塔木山家の大事な財宝を赤の他人に教えようとしたのだろうか。

異常に予知能力のある人形だが、自分の首が折れるとは思わなかったのかもしれない。ならば、あのまま木にぶら下がっていた方がマシではなかったのか。

その答えは、人形が目覚めなければ、永久に謎のままだ。

しかし、考えてみれば人生とはそんなものだ。謎の海に人間は暮らしているようなものだ。人間そのものが謎なのだ。

塔木山も若きホームレスも何を考えているのか、さっぱり分からない謎の連中だ。が、分からなくても別段困ることはない。

乙女の人形は、あの木にぶら下がっていれば、こういう目にあうことはなく、また猫山賀も目の前に人形を見ることはなかつただろう。世の中は一寸先が闇であり、だからこそ面白いと言える。明日どうなるか考える必要もない。神が決めることだ。運命論者の猫山賀は、いつもそうやって将来の不安を解消してきた。過去の失敗も、すべて神のせいにしてきた。その猫山賀が、目の前に横たわる人形を見て、神とは別の存在がこの世にいると確信した。魂だ。魂が実体から抜け出した時が、本当の死だと猫山賀は悟った。言い換えれば、再び魂が実体に戻れば、生き返ることが可能なのだ。人形の場合なら、実体が腐るといことがない。つまり、いつまでもそのチャンスがあるのだ。今ダメでも将来に希望が持てる。塔木山は、きっとその日のためにこの人形を修理して、部屋に飾っておくことだろう。

さて、この話は終わりに近い。アパートの住人の通報で（人形の首を人間の首と勘違いしたのだろう）警察はやってきたが、横たわる人形を見て苦笑をした。そして言った。

「今回の事件は、当分保留となるだろう。殺害事件のあった屋敷は燃えて、証拠となるものはもう捜しようがない。この人形が被害者の首を絞めたと言っても、動かない人形じゃあ証拠にならんよ。入院している者から聞いたが、この人形は本当に人間のように動いてしゃべれたらしいが、どんな悪いことをしようが人形を逮捕するわけにもいかんのでな。そんなことをすれば、笑いものになる。だから、もうこの話はなかつたことにしてくれ。警察も面倒な事件は関わりたくないもんで。じゃあ」と刑事たちは去って行った。

猫山賀はほっとした。この人形に対して愛着を持ってしまった猫山賀は、できればずっと自分の部屋に置いておきたいとさえ思うようになった。しかし、塔木山たちが帰って来れば、すぐに廃屋の方へ持っていくのだろう。明るくなる前に実行すると思われる。塔木山の所有物なのだから、それは仕方のないことだ。

窓から屋敷の方を見ると、火は完全に消えていた。地面の方を懐中電灯の明かりが行き来していたが、たぶん塔木山たちの明かりだろう。

それから一時間ほどして、塔木山たちが戻って来た。手土産は何もなかつた。

「財宝は見つからなかつた」と塔木山は悄然と言った。「屋敷の中に隠してあると思っていたのだが。というのも、彼女がこの部屋に来て、君に財宝の在りかを教えると言ったのを聞いた時、てっきり火事の後で、誰よりも先に君に財宝を確保してほしかったのではないかと推測したのだ。残念ながら大外れだった。こうなると本当に埋蔵金があるのかどうか疑わしくなってくる。埋蔵金伝説は世に多いが、どれも眉唾だからな」

「あるいは、火事になってもいいように土の中に隠しているかもしれませんよ」と猫山賀は言った。

「それはあるかもしれませんが、今はそこまで調査する気力が無い。はっきりここだと分かれば、ツルハシとスコップで、汗をかいてでも掘ったりできるが、そうでなければ、とても次のステップに進む気にならんよ。家の方は保険金で建て直すことができる。今、私の頭を占領しているのは、この人形のことなのだ。あの廃屋に運ぶのも気が引けるし、で、どうだろうか。しばらくこの部屋に置いてもらえないだろうか。いや、ちゃんと礼はするから。たった今私は思いついたのだ。あの敷地にプレハブ小屋を建てることを。プレハブ小屋なら半日で建つし、そこにこの人形を運べば、雨漏りのする廃屋よりずっといいだろう。防犯的にも安心できる」

人形に愛着を感じていた猫山賀は、

「僕は全然かまいませんよ」と言った。

空想好きの猫山賀にとっては、これでまたドラマの幅が広がるわけだ。この不思議な人形とともに時を過ごすことは、テレビもラジオもない猫山賀にはありがたいことに違いなかった。

そうして塔木山と若きホームレスは、朝が白みかけた頃、自分たちのねぐらに帰って行った。

その後、猫山賀は妙にそわそわとして、彼女の首を卓袱台に置き、しげしげと眺めるのだった。

その何とも形容できない生活は、数日間のことであった。

塔木山の敷地にプレハブ小屋が建った。電気と水道管を引いて、プロパンガスを取り寄せた。二人にとって、テント暮らしより格段に住み心地のいい生活となるだろう。ここなら人の目をはばかることはなく、堂々と暮らせる。

昼頃、塔木山と彼は、人形を取りにやって来た。塔木山は手に御土産を持っていて、なおかつ謝礼の入った封筒を猫山賀に差し出した。

「少ないが受け取ってくれたまえ」

「謝礼はいいですよ……」と猫山賀は言ったが、塔木山の強い気持ちで、それを受け取った。

そうして部屋に横たわっている人形を、塔木山は頭、彼は胴体を抱えてプレハブ小屋に帰って行った。

夕暮れになって、彼がやって来た。今夜引っ越し祝いをするので、一緒に酒でも飲んで話し明かそう、と言うのだ。

猫山賀に断る理由は何もなかった。

蝙蝠塚は、すでに蝙蝠が飛び交っていた。

猫山賀は、もうホームレスではなくなった彼と、一緒にプレハブ小屋に向かったが、この時彼は自転車を押して歩いていた。それは徒歩の猫山賀に合わせたのだろう。しかし、来る時も彼は自転車を押して来たのだ。窓からそれを見て、猫山賀は奇妙に思った。というのは、自転車の荷台に荷物は載っていなかったからだ。自転車をわざわざ押して来る必要があるのかと。そのことは、酒の席で質問するチャンスはあるだろう。しかし、謎は謎のまま残しておくのも一興かもしれない、と猫山賀は思った。なぜなら、自分も世間から見れば何をして暮らしているのか分からない人間だ。そのことを聞かれたら、猫山賀も返答に困るだろう。

そんなことを考えながら、出来立てのプレハブ小屋の前に二人は到着した。

中では、早くも塔木山が珍しく陽気に歌をうたっていた。

——丘の大木、霜の月、満々とした青い光に二番枝——

そう言えば、今宵こそ十一月の満月の夜なのだ。月はまだ東の山に隠れていた。

了